



Title	国民社会の研究各論 第一章 通巻第十六巻：生活構造28
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1963-08-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77520
Type	manuscript
Note	国民社会の研究各論 第6章：日本国民の社会意識 『鈴木栄太郎著作集7（国民社会学原理ノート）』を出版した際のソースとなった原稿である（同書内での言及による）。
File Information	1033_013751028.pdf



[Instructions for use](#)

生活研究 (2)
K-2

(2)

28

第一章

NOTE BOOK

MADE OF FINEST PAPER
PREPARED IN TOKYO

生活研究

國民社會の研究

各論

第一章

通卷第十六卷

昭和二十七年五月十日

FA4

28

である。

私は本意を以て同居関係と集落
形成とを同じとし同居関係を先
にして集落形成をその次に考え
ておられる。一時的現象の予情によ
り同居関係が先づ第一に発生し
同居関係がその中に凝結したのと
思われるから集落形成を第一に次に
同居関係を同じにする可きであらう
考へておられるわけとして晩年の時
に集落形成に起るたをかく私の理解
では同居関係の何れかの統合の上

に集約格記号は成立していることと云ふ
方が存在しているからである。

才一節 / 同居関係

今日の民法は皆何かの形に於ける同居
関係の中は生活の本據を以てい
ふ。生活の本據とは睡眠して労力に
なつて場合、自分の生命を寄託して
いふところ、つまり睡眠の場合、⁽²⁾自分が最
も大切に思つていふ人々の生命を寄託
し、⁽¹⁾船に乗り、⁽³⁾自分の命を考へたところ、
つまり、⁽³⁾自分が一番大切に思つてい
ふ物品を保管して、いふところ、それが
生活の本據である。自分の命が半
活の本據で、一般に家族はそんな性質
を以てして、同居を共有して、いふところに
一心同居にならざるを得ない性質を以て

とつて、^{おそく}世帯の保全を共にし、財産を
共にし、^{おそく}名譽を共にし、運命を共に
して、いよと云ふに、家族は親戚の
以上なきを指す。
家族は血族であつた云ふに親戚
を理由かあるのはなく、むしろ同
居関係を以てして、いよと云ふに親戚か
ら、いよと云ふに根拠がある。
家族は兩戸一校の中に運命を
共同守備して、いよと云ふに、家
族は相互の利益が、いよと云ふに、
おそく、いよと云ふに、いよと云ふに、

文字通り「運命」の仲

子である。

家族は血縁者の中から今迄も様々
一團丈けか共同片位して特別の一團
になつたのは昔も意味多い史の上
の同位である。（此等な理由からであるか否かは
宗族同居團體の
私は今右右の如き起程に同位
題は全然おれおれにしてゐるが
現在一般の足も宗族同居團體の精
成は月毎に年毎に強しく変化して
いふよりは是迄可得にはゆかぬ。
私はこの変化を厚子の如く現在
中に観望してゐる。直系宗族より
夫婦家族への移行として取扱

(一) 生活の職場支配の傾向
(二) 生活の口家支配、組合支配の傾向
右の二は資本的保存的自由経済
の傾向、一は労働組合的革新的
的社會主義的陣営からの指導的
向である。右の二の傾向も家族
の秩序的機能は弱まりつつある。

は水し、家族より世帯への空間
として山程跡をみる。世帯世帯増加
の傾向、集合住宅、アパート、独
身寮寮、集積園町不案内の
増加は何れも同居団体構成に
おける異変である。是れが近時
の職場中心の社會の成長に伴つて
のものである。是れである。
第二次大戦の頃から家族は皆
同居団体をなし、同居団体は強と
皆家族より成立してゐたのである。
右の二も都市家族の中には

地

その一部分が他に居住しなう、その

宗祇の同居団体の中に宗祇外の

者が加はつていた場合、^{宗祇}くは

あつたのであうが、^{他人}その他の税使も

同居の税使もや、^{他人}明白であつた。

勅諭送る、^{他人}旅行のために他出の場合

令があつたと告げ、^{他人}底に使用人、同居

人（^{他人}親族、他人）も宗祇と告げ同居

例^{他人}この場合は、^{他人}令が、^{他人}な。

法律上の権利義務の主体の不却

の本據を決定^{他人}すは社屋生

活の円滑を^{他人}期す上に必要

である。

生活の不節の本據は土地に固定
着した労働物以外には考えられ
ぬ。一面の財子に^金国民に同時に適
す。必要ある場合には^又皆その本據に
あうしむるべきをせしめ、~~特定の財~~
何れの時におこもその者に^又運移の
仲要ある場合の為に本據は^又社会生
活に^又必要である。これなくしては^又責任
ある^又社会生活は不可能である。
本業^又手藉上の本藉はかくの如く物
質^又如^又山^又の^又として^又生^又れ^又た^又ので^又あ^又ら^又う^又か^又

完全に移住化し、舊地あつゝ家屋も
存在せぬところを本籍といふ場合
もある事を実例によつて私は知つてゐる。
然し今日では本籍は口民が口家
に通すゝ處にである。

生活の本籍は口民が社会に通
すゝ處にたとへる。生活の本籍
は住居であるが、それは家族共同
の住居であらうはかぎらなうか
多くなつた。

今日日本の都市に於ける同居團
体は宗族より大々かつたり、又

宗族よりわさかつたりすゝ場合が多いが、
然し之は同居者達の生活の本據
を失つてゐるには違ふが、
等調位の累位にこの同居関係を
用ゐるものが多い。然しこの場合
この同居関係を世帯と呼ぶ。
家族と大抵同一の性格の同居係
であるが、宗族より大である場合、
ある場合も多いのである。
世帯は世帯と云ふのは、
大家宗舎、下家、アハト、船舶
おそれ等の如く、
家族同居関係あり

母妻能員の交甚ち多く、家に住家を
を共同にしてつとむる、丈此の事であ
り、此の一社の家の縁丈のおそれ同
家世と同様同の母身家として
此の社会的区画は甚ち異なるとあり、
「同家若輩の同の

とに同同居団体は、此の時子的
各々の生活あり、皆生活の本
據を有してつとむる、ホテンの
窮泊を此一夜の生活の本據はる
こにあつたのである。

どんな大都市でも深夜の街
は静まり返つて人は皆互れく

どんな形で定められるか、その生活の本據に掛かっている。この本據から出た次の日の活動はどこかで定まる。一冊の本據もあるが、多くは何年何十年経ての生活の本據をここに定めた夜毎にそこを過すのが一般である。

日本では直子宗族より夫婦宗族への移行に同連した。同族関係の内房の定質もあるが、職場中心社会への移行とともに色々の定質が見られる。

才二節 集落の形

同居団体の地域的集合団体を
集落と云ふと云ふは、同居
団体か外に於いてその共同居住に
よつて即ち家屋によつて察知され得
る程に集合団体を、かくの如き家
屋の集合の外に於いてその純
命的統一を察知するは出来ぬ。
集落と集落とをば一列にない
外延を以てする場合は、集落
はよくの例外である。集落
とは集合団体の上にその下に重複し
かおつてゐるものが常である。

日本における集落は河系に沿って
おろかり沿海平原には多数の集
落がみられる。河川の分岐点及び
大きな交通路と河川との接合
点の近くには大きな集落がみ
られるが、容易に推察される。
その外形において大きな集落にはこ
に多くの交通路が集まっていると、
明らかな程度ではある。集落が密
集しているのは、大きさを集落に
たればなる。概して集落の傾向は甚し
いものである。交通路の集まること

左いわすを集落には住居以外の
建物も有してゐるから分よ。

わすな集落は曲がらあつて大寺
な集落は都市であらう。又集落
立ち入つて難い所直ちにうたつて
る。

集落は都市と村落か。その例
かである。都市には交通路が集まり
人の往来がはげしく、村落には交通
路も並みの村人等の通行のため細い
道路である。また、車は生活
の足を回らなくとも容易に

都市には

左活動の本據即ち機關が集
まり、それらの生業上の活動のお
り仲業な交流の用と果してこの
様々の交流路線が都市に集
まるとしてある。人や物や心か
ら都市に引いて短集するのほをの
みである。

村落にすむ人が、政治の為に
経済の為に互の他村との交通の
にもつとるにせよ、然るに中心
にもつた人があれば、又世界
どこかにつた人があれば、つた

之行、道路として、近くの町に出る場^後
場が郵便局が村の空か、学校か
銀行の中、^社、^本、^支、^店、^等、^{あり}、^て、^{いる}、^{こと}、^に、^行
~~わ~~、~~か~~、~~ら~~、~~な~~、~~ら~~、~~ぬ~~、^そ、^ん、^な、^様、^図、^の、^中、^に
お土産を売っている。親様図を道は
水戸の中央にある。金の最大の
様図は、他は、様図の通り、
事、お、お、お、
口の隅に、^か、^い、^口、^の、^中、^央、^に、^通、^ず、^窓、^口
は、^近、^く、^の、^町、^に、^在、^る、[、]、^二、^つ、^一、^エ、^ー、^ク、^ン
、^ハ、^ウ、^ン、^ト、^ン、^ル、^も、^道、^す、^窓、^口、^は、^村、^の、^中、^の
ホストで、事、た、[、]、^場、^合、^も、^あ、[、]、^様、^図

り良き活の稼りの方面の中心活動
ルところ、窓口の一端は田舎町に
もあよ。

かくの如き窓口は、新卒の集まり、
い、構図である。